

白骨章（五帖第十六通）

それ、人間にんげんの浮生ふしやうなる相そうを、つらつら観かんずるに、おおよそはかなき
ものは、この世よの始中終しちゆうじゆう、まぼろしのごとくなる一期いちごなり、され
ば、いまだ万歳まんざいの人身にんじんを受けたりということいっしやうをきかず、一生過すぎ
やすし、いまにいたりてたれか百年ひやくねんの形体ぎやうたいをたもつべきや、われや
先人さきひとや先さき、今日きふともしらず明日あすともしらず、おくれさきだつ人ひと
は、もとのしずくすえの露つゆよりもしげしといえり、されば、朝あしたに
は紅顔こうがんありて、夕ゆふには白骨はくこつとなれる身みなり、すでに無常むじやうの風かぜき
たりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちに閉とじ、ひとつの息いきな
がくたえぬれば、紅顔こうがんむなしく変へんじて、桃李とうりのよそおいを失うしないぬる
ときは、六親眷属ろくしんけんぞくあつまりて、なげまかなしめども、さらにその

甲斐あるべからず、さてしもあるべきことならねばとて、野外におく
りて、夜半の煙となしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。あわ
れというもなかなかおろかなり、されば、人間のはかなきことは、
老少不定のさかになれば、たれの人も、はやく後生の一大事を
心にかけて、阿彌陀仏をふかぐたのみまいらせて、念仏申すべきも
のなり、

あなかしこ　あなかしこ

白骨章の大意

人の世のはかないようすをよくよく考えてみますと、この世はま

ぼろしのような一生です。一万年も生きた人がいるなどと聞いたことはありません。人の一生はすぐに過ぎてしまうのです。今、いたいだれが百年の命を保つことなどできるでしょうか。

私か先か、人か先か、今日とも知れず明日とも知れず、人の命の尽きる後先は絶え間のないものです。朝には元気な顔であっても、夕べには白骨になってしまうような身です。無常の風に吹かれると、二つの眼はたちまちに閉じ、一つの息はながく絶えて、元気な顔もたちまち美しいすがたを失ってしまいます。そうやってしまえば、家族が集まって嘆き悲しんでも、どうしようもありません。

そのままにしてはおけないので、野辺のおくりをし、茶毘にふして煙になってしまうと、ただ白骨だけが残るのです。それはもう言

葉にもいい尽くせない悲しみです。

人の世のはかないことは、老若にかかわらないことですから、だれもみな後世の浄土往生というもっとも大事なことをこころにかけ、阿弥陀如来を深くたのみたてまつって、念仏しなければなりません。